

鴻池

「七難八苦」
山中鹿介と新六の親子物語

清酒祭祥の地

山中鹿介

「我に七難八苦を与えたまえ」という名言で有名な武将山中鹿介幸盛の子である新六は武士の身分を捨てるとともに名を改め、商人となり清酒を造った。のちの鴻池財閥の始祖となった。

山中(鴻池)新六

どれだけ離れていても、
見れば月は同じだと、
月を見ていれば、
父が近くに感じられる。

「月に捧ぐは清き酒」より

一章戦場を照らす月

小前亮(著)

「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」

あえて試練の道を選んだ戦国武将 山中鹿介。
その子、新六は商人となり、苦難を乗り越え初めて清酒を醸造し、鴻池財閥の根幹を築く。
鹿介と新六。それぞれの道で、七難八苦を乗り越え生きた親子鷹であった。



1545年～1578年
山中鹿介
(安来市教育委員会提供)



1570年～1650年
山中(鴻池)新六
(鴻池家蔵)

山中幸盛(通称：鹿介)は、出雲国・月山富田(がっさんとだ)城(現島根県安来市)を本拠とした尼子(あまの)氏の家臣。戦国時代から安土桃山時代にかけてすぐれた武勇で知られ「山陰の麒麟児」の異名をとりました。

安芸国の毛利軍に攻められ月山富田城を落とされ、集めて捲土重来を期し、山陰、山陽、近畿を舞台に三次にわたり尼子家再興運動を展開しました。

鹿介は備中国阿井の渡(現岡山県高梁市)で毛利氏家臣に謀殺され、志は潰えますが、その不屈の精神と揺るぎない忠誠心は日本人の琴線に触れ、「忠義の武将」「悲運の英雄」として後世に語り継がれます。江戸時代には講談に取り上げられ、明治以降も教科書に掲載されました。「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」と三日月に祈ったという話は有名です。

鴻池家の始祖、山中新六幸元は、山中鹿介(しかのすけ)の長男。摂津国鴻池村にいた大叔父に預けられ、成長しました。武士の身分を捨て醸造家に転身、清酒を初めて醸造し、鴻池を名のり江戸に清酒を出荷して財を成したと言われています。十人の子どもに恵まれ、また多くの子孫は、主に大阪で酒造業・海運業・両替商・新田開発などで成功を収め、豪商鴻池家に発展しました。

伊丹市鴻池にある市指定文化財「鴻池稻荷祠碑」(江戸時代後期には、慶長五年(一六〇〇)、山中新六幸元がこの地で初めて清白酒(もろほくすみざけ)清酒を造り、大いに売ったこと、屋敷の後の鴻池の名を稲荷に用いた等の盛旨の文章(漢文)が刻まれています。それまでの濁り酒(どぶろく)から清酒を大量に醸造する技術を開発したということであり、いわば日本酒の産業革命でした。伊丹市は、これをもって「清酒発祥の地」を標榜しています。



この石碑は伊丹市
鴻池稻荷祠碑

こぼればなし



山中鹿介の大河ドラマ放映実現をめざす会



島根県安来市は月山富田城や山中鹿介の誕生の地です。
安来市関係団体による放映実現をめざす会や市議会議員連盟により、ヒーローである山中鹿介の大河ドラマ化実現に取り組まれています。鹿介の大河ドラマ実現をみんなで応援しましょう。



新六の登場も
観たいものです。

たるとる
清酒発祥の地マスコット

「清く澄みわたる酒」驚きのエピソード!?

鴻池屋は蔵元となり、白濁したどぶろくを造っていました。
ある日、店の下男が叱られた腹いせに酒の桶に灰を投げ入れました。ところが酒が濾過(ろか)され「清く澄みわたる」酒になりこれをヒントに新六は清酒を造りはじめ大変な評判となったとされます。
このエピソードは歌舞伎作者、浜松歌国の隨筆「撰陽落穂集」が伝える脚色との指摘もありますが、鴻池屋の酒は飛ぶように売れました。



エンブレム ニッカウヰスキーの紋章と山中鹿介



同じ中国地方の広島県竹原市出身のニッカウヰスキー創設者、竹鶴政孝氏は、様々な苦難試練に耐えた鹿介の姿に共鳴し、その愛用の虎を紋章(エンブレム)の中央のデザインに採用しました。この紋章は現在も製品のラベルやキャップに使用されています。